だいや川通信

今市の水を守る市民の会

第 48号

2020年1月15日（水）

GM（遺伝子組み換え・ゲノム編集）作物の国内栽培を許すな！　脱GM・脱農薬社会への転換を

本通信の第44号に、2017年に「主要農産物種子法」の廃止について記した。これによって米、麦、大豆、などは、国、都道府県が責任をもって種子の生産、開発にあたるという原則が崩されてしまった。危機感を持った道、県などは条例を制定することで対処する運動を展開、すでに多くの道県が条例制定を実現した。（山田著①215頁以下）

栃木県でも「種子の会とちぎ」などを中心とする制定運動が展開され、昨年の11月には県議会で県の条例案が可決された。ところが、これが、種子の生産を民間企業などに委託するという、全国の他の条例とは真逆のものであった。筆者は70余名という、県議会としては異例の多数の傍聴者たちと、栃木の食と農の未来への暗澹たる思いを共にした。

TPPの批准と前後して、種子法以外にも重要法案や要綱などの改定が、矢継ぎ早に行われている。①公共種子情報の多国籍企業など大企業への無償提供（農業競争力強化支援法）②農薬グリホサート（商品名・ラウンドアップなど）の残留基準の大幅緩和　③遺伝子組み換え（以後GMと略）農産物の表示厳格化。これにより、現在豆腐や納豆などに記されている「遺伝子組み換えでない」という表示は困難になる。　④遺伝子組み換え作物の第2世代とされるゲノム編集食品が19年10月以降、表示なしに市場に流通。　⑤最後に残ったイネも種子を含めて多国籍企業の支配下に。F1種子やゲノム編集種子、GM（グリホサート耐性・機能性強化）イネなどが出回る懸念。　⑥20年早々には種子の自家採取禁止（種苗法改定）。これは、まさにモンサントなどによる日本の食と農の完全支配構造の構築そのものではないか。

その後、宇都宮で、44号でも引用した、安田節子さんの講演会が開催された。今回は、その講演と新著③などを参考にしながら、私たちの食と農の深刻な現状について考えてみたい。まずGM食品ついて。今回の講演で筆者が改めて驚いたことの一つは、現時点で既に「日本人はGM作物を世界で一番多く食べている」という事実だった。主な遺伝子組み換え（GM）作物はトウモロコシ、大豆、菜種などだが、これらの作物の我が国の自給率は大豆の7%を除いて、あとは0%。つまり、すべて輸入。このうちのGMの比率はすべて90%前後である。日本では納豆などには「組み換えでない」との表示がされているが、これらの作物が主成分でない食品や、醤油、食用油、コーンフレーク、異性化糖、水あめなどには表示義務がない。

日本が米国からGM作物を輸入し始めて20年が経過したが、その間、我が国は納得できる安全性の確認をすることなく輸入を継続している。だが世界の他の国々では、安全性に疑義を呈する研究が多数発表されている。ここでは2012年10月2日、フランス・カーン大学のセラリーニ教授らが発表した研究だけを紹介しておく。この実験ではラットをそれぞれ、GMトウモロコシ、除草剤グリホサート水溶液、そして、その両方を餌として与える、3つのグループに分け、2年という長期間にわたる、大掛かりな給餌実験を行った。結果は、いずれのグループのラットにも巨大腫瘍ができて次々と早期に死亡してしまった。また、メスは大きな腫瘍の発生率が高く、大半が乳がん。オスは肝機能障害と腎臓の肥大など解毒臓器への影響が顕著だった。メスは70%、オスは50%が死亡。（安田著③　14頁、吉田著②68頁）

この実験は世界中に大きな衝撃を引き起こしたが、とりわけロシア政府はこの結果を重視し、予防措置の見地からGMコーンの輸入を直ちに全面禁止した。対照的に日本の食品安全委員会は、この研究内容を否定したとのこと。（吉田著②　68頁）　吉田氏によるとロシアは、2020年までに有機農業での自給を達成し、さらにそのあと非GM農産物の世界最大の輸出国となることを国家目標にした。

米国環境医学会は多数の動物実験で免疫力の低下、子孫減少、肝臓・腎臓の解毒器官の損傷が起きるとしてGMの一時停止、長期の安全性試験、全面表示を求めた。GM作物に関して、すでに禁止した国々は独、伊、仏、露、など8か国。EUは判断を各加盟国に任せたが28のうちの19か国が非GMを選択したとのことである（安田氏講演資料）。

また、GM作物に使用される除草剤グリホサートも同様に環境ホルモン作用,癌、出生異常、脂肪肝、子供の神経に作用等の有害性が認められており、WHOの研究機関はラウンドアップ（主成分グリホサート）を5段階の発がん性のリスクの上から2番目に指定した（2015年）。またアメリカではラウンドアップで悪性腫瘍になった人たちが裁判に訴えて、いずれも勝訴し、多額の賠償金の支払いが命じられてバイエル（モンサントの親会社）の株価が急落している。つまり、GM作物及びグリホサートなどの農薬は、いまや世界中の国々から急速に締め出されつつある。ところが、日本だけは、逆にその規制が、けた違いに緩和

目次：

GM作物の国内栽培を許すな！　1
ゆったりウォーク・芹沼　2
台風19号・ダムは？　3
活動報告　4



ゆったりウォークで出会った棗

お知らせ

定例会

毎月・第4金曜日

午後1時～2時

参加希望の方は会場・日時をお問い合わせください。

◆ ご協力お願い

毎月11日はイオンの「イエローレシートキャンペーン」日です。半年に一度、レシート合計金額の1%が登録団体にカードで寄贈されます。

当会も登録しています。毎月11日のお買い物時には、「今市の水を守る市民の会」のボックスにレシートを入れてくださるようご協力お願いします。当会の活動に必要な品物を購入させていただきます。

されてスーパーなどで大量に販売されている。気が付けば日本は、「世界中からのGM作物と農薬グリホサートの吹き溜まり」と化しつつあるようだ。(図1)そして世界は急速に非GM、無農薬の有機農業の方に方向転換しつつある。こうした世界の中でも、ひときわ劇的な変化がみられる国がアメリカである。

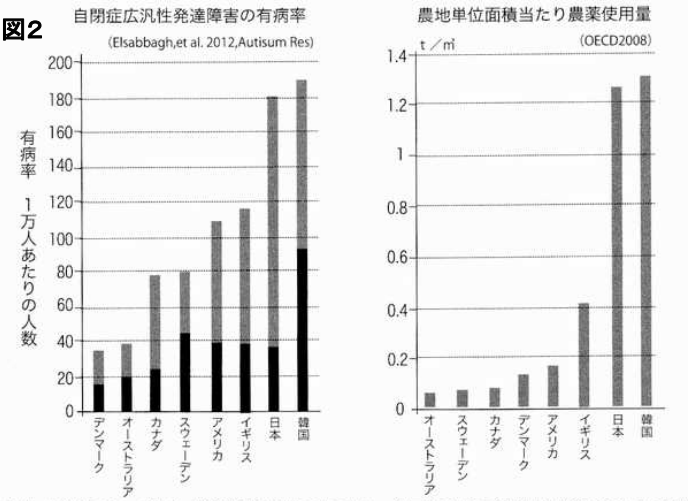
わずか5年前にはジャンクフードの山といっても過言でなかった米国のスーパーマーケットは今、大きく様変わりして無農薬、無化学肥料の有機栽培の野菜や、非GM食品が所狭しと売られている。(山田著①)その火付け役はゼン・ハニーカットさんという、ごく普通のアメリカの母親だった。元農水大臣の山田正彦さんは18年9月にハニーカットさんに会いに米国に行き、現地のスーパーマーケットに案内されてカルチャーショックを受けたという。ゼンさんの三人の息子はアレルギーや自閉症にかかっていたが、非GM食品や農薬、化学肥料を使わない、オーガニック食品だけを厳選して摂取することによって、短期間のうちに、そうした症状、病気を治すことができた。この体験を全米の母親たちに伝えたいとして、ゼンさんを中心に「ママズ・アクロス・アメリカ(アメリカ中のお母さんたち)」が結成され、この運動が大きな力となって、アメリカの食は、わずか5～6年で劇的に変わってしまった。(山田著①157頁～ゼン著④)

安田さんも今回の講演で同様の事例を報告している。一つは長谷川博氏(NPO福島県有機農業ネットワーク)らの調査(2018年)。普段、慣行食材を食べている48人の尿中のネオニコチノイド農薬6種類を測定してみると、平均が5ppb。この人たちのうちの38人に有機食材を5日間食べてもらって測定してみると、その値が2.3ppb(50%減)に下がっていた。さらに1世帯(4人)に有機食材を一か月食べてもらって測定すると、結果は0.3ppb(94%減)となって、農薬は、ほとんど体外に排泄されていた。またアメリカの調査(Environmental Research 2019年2月)では、通常の食事を6日間食べた後、全有機食を6日間食べた後、検査をしたところ、農薬と農薬代謝物のレベルは平均で60.5%低下した。講演の中で、もう一つ印象に残ったグラフがある。それは自閉症など発達障害の有病率と各国の農薬使用量とに有意の関連がみられるというグラフ(木村―黒田著⑤156頁・安田著③97頁)である(図2)。この比較は厳密なものでなく、因果関係を直接示すものでもないが、それでも農薬使用量と自閉症の有病率の一致は無視できない、と木村―黒田さんも記している。

安田さんも「これまでヒトへの影響は、一日摂取許容量以下であれば問題ないとされてきましたが、最近のいくつもの研究で、ごく微量を慢性的に取り込んでいくと、子供の脳神経の発達に影響があることがわかってきています。」こうした最近の研究成果から見ると、現在、農水省が支援している、いわゆる「環境保全型農業」の減農薬、減化学肥料による「特別栽培農産物」なるものが、この問題を解決するうえで、ほとんど意味をなさないことがわかる。無農薬にすることが重要なのだ。

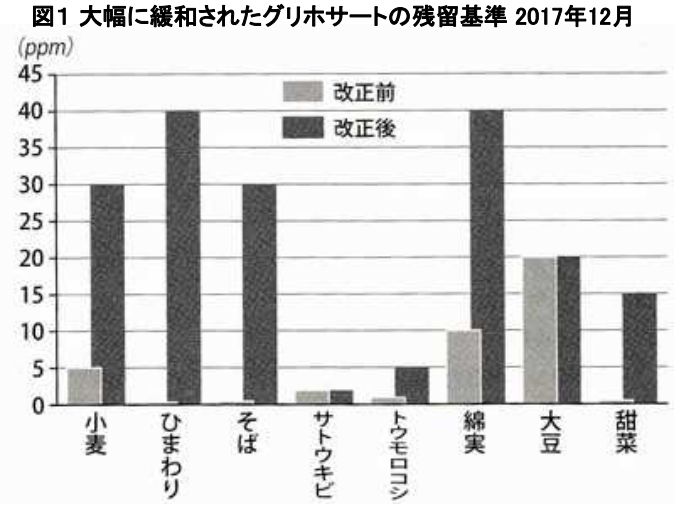
そろそろ結論を急ごう。最初に記した様に、我が国の農業は、

図2



出典:日弁連のシンポ「今、農薬問題を考える」の木村ー黒田純子氏の資料より(2018年7月7日)

図1 大幅に緩和されたグリホサートの残留基準 2017年12月



従順な安倍連立政権によって、モンサント等多国籍企業の完全な支配下に入るべく制度設計されている。種子企業は、各県などが品種開発した「公的種子」の情報を得て、それを自分たちの種子として販売するため、その公的種子の遺伝情報を解析して、その特定遺伝子に特許をかけて私有化し、「特許種子」として販売する。この場合、企業は農家に対して、種子、農薬、肥料をセットで売り、収穫物の全量買い取り委託契約を結ばせて、種子供給から販売までを一貫して抑える方式だ。こうした農業のあり方は、ゲノム編集・GM種子の使用や農薬の多用につながっていく。(安田著③ 49頁)いずれにしても「ひとたびGMイネの生産が始まれば、普通のイネと交雑して遺伝子汚染が広がり、二度と後戻りができません。交雑した遺伝子は次の世代に受け継がれ、しかも増え続けていきます。遺伝子汚染を引き起こさないために、GM作物の国内栽培を許してはならないのです。」(安田著③ 60頁)また、公的種子がなくなり、民間種子だけになれば、販売される品種が限られて、今後起こりうる気候の大変動などには全く対応できなくなってしまう。これではアリジゴクのようなもので、もがいても、もがいても、その支配の中に引き込まれていく…

筆者は、そうした中で日本人が、この支配網を突破して生き残っていくためには、非GMで、無農薬の有機作物の自給率を高めていくしかないと思っている。そのためにも、さしあたり、安田さんなども言われるように、地域の小中高校での有機・無償の学校給食を目標としたい。そんな夢みたいなことを…などと思われるかもしれないが、現に韓国のソウル市では、2021年からの全面施行を決定している。日本は世界的に広がりつつある、脱GM,脱農薬の潮流から取り残されているのだ。

それ故、農家の皆さんにも、多国籍企業の特許種子が席巻して来ようとしている今だからこそ、無農薬・有機農業への転換を真剣に考慮していただければと切に思う。幸い栃木県には木村―黒田さんも評価されている。「NPO法人民間稲作研究所」がある。(木村―黒田著⑤ 189頁)理事長の稲葉光國さんの有機農法は「コウノトリと共生する水田づくり事業」を兵庫県豊岡市より委託され、成功に導いた実績を持つ。現在の新しいコンバインなどを使って、数ha位の、かなりの広さでの有機のイネ作りにも適し、省力も考えられた農法のようだ。詳しくは稲葉著⑥をご覧になることをお勧めする。 (了 文責・森 2020/1/9)

参考図書

①山田正彦著「売り渡される食の安全」(角川新書860円)
②吉田太郎著「タネと内臓」(築地書館1600円)
③安田節子著「食べ物が劣化する日本」(食べ物通信社1400円)
④ゼン・ハニーカット著「あきらめない」(現代書館1500円)
⑤木村―黒田純子著「地球を脅かす化学物質」(海鳴社1500円)
⑥稲葉光國著「無農薬有機のイネつくり」(農文協1700円)
⁂参考図書⑥は、ご希望の方にはお貸しすることもできます。お気軽に当会の連絡先までお電話ください。

おおわらじの里 芹沼を歩く

ゆったりウォーク　芹沼編　　2019. 10. 26実施

古大谷川（こだいやがわ）と大谷川に挟まれた地区・芹沼は、鬼怒川方面に向かうバイパスから右折して大渡・船生方面に出る国道461号線沿いにあります。古くからの農村地帯で、見事に整備された水田が広がっており、芹沼保育園附近の交差点は最近拡幅されてスムーズな流れになりました。昔から水の豊かな所で地区内にはいくつもの沼があり、芹が立派に育つ沼があったことからその名がつけられたそうです。また、藤原の鶏頂山にちなむ「金の鳥伝説」が生れたのも、地区で一番大きな姥ヶ沢沼にまつわる物語がその基軸にあったからと言われています。

今回、芹沼を選んだのは、この夏NHK宇都宮放送局がニュースとして放映した大わらじ奉納がきっかけです。日常の移動をクルマで過ごしている私達にはとても知ることのできない世界。日光市に居住していてもなかなか足を運べない地なので、ゆったりモードでこの芹沼を巡ってみようと約4kmを14名で歩いてきました。この距離と人数は参加者同士のコミュニケーションが程良くはかれ、今後も定着させていきたいものとなりました。大わらじの他にも、豊かな湧水や富士山（ふじやま）と浅間神社、岩間不動尊などがあります。二つの台風が去った後のウォークでしたが、天候に恵まれたことも幸いでした。ポイントとしたのは次の三つです。

① 大わらじ 地区内二ヶ所に奉納されていますが、その一つである浅間神社鳥居傍に掛けられているわらじを見てきました。畳半畳ほどの大わらじは「府行の辻飾り」といわれているものだそうで、隣村との境に巨人の履くわらじを掲げることで村に悪い病気が入ってこないよう、人々の祈りを込めた行事となっています。この素朴な風習を毎年続けるのはたいへんなことでしょうが、それを支えている地区の人々の結束の強さは、少子高齢化の現代にあってはたいへん貴重であり、これからの時代へのひとつの手本になるのではないかと思えたことでした。

② 富士山 芹沼にも富士山があり、「ふじやま」と呼ばれています。全国各地にある浅間神社は富士山の神を祀る神社で、当地芹沼にもこの神社が建立されています。その参道は地域の人によって常に清掃がゆき届いているようで、きれいに整備されていました。富士講の人達も参拝に来ていることを自治区長さんより伺っていたので、中社・奥社を経て山頂にまで足を進めたかったのですが、台風のすぐ後でもあり、急登場所での滑りを懸念して途中で引き返しました。山頂に向う尾根は杉が大きく育っており、かつては鬼怒川方面への眺望が素晴しかっただろうと想像しながら山を降りました。浅間神社の上り口左側には「岩谷不動尊」を祀るお堂があり、それを囲むようにしてたくさんの石仏が坂の此処かしこに建てられていました。

③ 湧水 大谷川扇状地が生み出した湧水地は芹沼や隣の轟地区にも数ヶ所あります。二ヶ所を見学してきました。そのうちの一ヶ所では以前に山葵を栽培していたそうで、玉石積みされた遺構からは今も水が湧いていました。もう一つは轟地区への農業用水の源になっているところで、杉林の中からの湧出はかなりの量で、木漏れ日が水面に映り、外からの音が途絶えたその場所に立つと、遠い日に戻ったような感覚になりました。春になると、遊水地近くの杉林がその花で埋め尽くされるであろうと想像できる植物もたくさん見つかり、もう一度訪れたい場所と、多くの人からの声も上がった場所でした。

富士山を後にし、豊岡中学校を目指して旧道を歩きました。この道はかつて芭蕉も通ったと言われている道だそうです。途中、振り返って「ふじやま」を仰いでみたら、たしかに懐かしい富士山の姿そっくり。参加者皆さんからも感嘆の声があがりました。帰着地の公民館が見えてきた頃、スタッフの知り合いとばったり遭遇。農家であるその方から敷地内に実っている棗（なつめ）を皆で食べさせていただきました。私を含め多くの人も初めて口のするもの。青林檎に通ずる懐かしい味でした。その地に暮らす人々とのふれあいを大事にし、参加して下さった皆さんとも交流を深めたいという思いで「ゆったりウォーク」を続けています。今回も温かい思いをたくさん残すことができました。参加してくださった皆さんの声を参考に次回プランを作りたいと思っています。ぜひまたお出かけ下さい。　　（塚﨑）

参加者感想 ★ のんびり歩けて良かった ★ 地元とはいえ、車に乗って通るだけではわからない新たな発見があって、面白かったです。このような企画の素晴しさが、もっと色々な方に伝わるといいと思います。ぜひ今後も続けてください！★ 今日は秋晴れの中、美しく豊かな水と里歩きが楽しめました。（道端にゴミがあったのが残念） 身近な風景で見すごしてしまうような所にある、美しい水を保つ必要があると感じました。ありがとうございました ★ 近くにあって遠かった所を見られました。ありがとうございました ★ 時間もコースも適度で良かった。あまりハードでなく、普段歩かない道を行ってみたい ★ 今日のように午前中で回れる位のところ。自然を感じられる神秘的なところ。今日はありがとうございました ★ 楽しい里山のウォーキング。又、知らない湧水池を知り、春にショウジョウバカマ等をみに来たいと思いました。機会がありましたら参加したいと思いました ★ 里山歩き、いつも楽しく参加させていただいております。ナツメ、初めて食べました。これからも日光の湧水を見せていただきたいと思います。

「芭蕉の歩いた道」から富士山を望む。次ページもご覧ください。



■ ゆったりウォーク芹沼編を歩いて

今市に「富士山」があるって？・・・芹沼にありました。でも読み方は「ふじやま」。

芹沼公民館を出発し、まず初めの湧水スポットから国道へ出て富士山に向かって歩くもそれらしき山は見えません。道路沿いに大わらじが掲げられていました。隣村との境で、道から悪い病気等が入ってこないようにとの意味があるそうです。傍らに岩谷不動尊があり、ここが富士山の登山口。時間の都合で、途中にある浅間神社（せんげんじんじゃ）までUターン、頂上は想像だけになりました。次は轟へ。何気ない道から入っていくと、こんこんと湧き出ている湧水地がありました。今市の扇状地あちこちに湧くきれいな水は本当に貴重なもので、いつのまにか無くなってしまわないように、守っていくのは大事なことだと改めて思いました。

芭蕉の歩いた道を通って帰路につきました。ふと後ろを振り返ると富士山が堂々の三角の姿を見せています。ああ昔の人はこの場所でこの姿をみて、この山を「富士山」と名付けたのだと合点がいきました。

通りすがりの畑で作業している人を「なんか見たことがあるような～」と思っていたら、他の団体で一緒の方でした。傍らには珍しい、しかも食べごろの実が鈴なりに。聞いてみたら「なつめ」でした。どうぞ食べていいですよとのことで、皆さん満足するまでいただきました。このような出会いがあるのがゆったりウォークの魅力だと思います。予定の12時ころには公民館に到着し、解散となりました。たくさん道草をして、予定外のことがあるのが楽しいゆったりウォークです。　　（毛塚）

だいや川通信
第４８号

活動報告

９月　３日（火）落合西小学校4年生授業「長畑川の生き物しらべ」
（塚崎対応）

９月２７日（金）　定例会
１０月１２日（土）　川虫たんけん（小代・行川 ― 台風により中止）
１０月２５日（金）　定例会
１０月２６日（土）　ゆったりウォーク・芹沼編
１１月２７日（水）　定例会

郵便振替口座　00140－4－535550
〒321-1102　日光市板橋1732-1　森 方
今市の水を守る市民の会
0288-27-2183（8時～17時：森）
0288-26-3324（17時～21時：塚崎）
http://www.somesing.net/daiyagawa/

右写真：
立ち寄った杉林の中の湧水地
芹沼や轟周辺は
こんな場所が
あちこちにあります。



■ 道順
芹沼公民館 出発 ⇒
岩谷不動尊 ⇒
浅間神社 ⇒
富士山登山⇒ ミステリーゾーン ⇒ 芭蕉の歩いた道 ⇒ 豊岡中学校 ⇒ 芹沼公民館 帰着



写真：富士山登山口にて
左：入り口の「大わらじ」





台風19号 ― ダムはどうしたか

冬に入り、川は何事もなかったかのように静かに流れている。台風19号の去った一ヶ月後、行川沿いを鹿沼まで車で通ったが、そこでは今まで見たこともない光景が広がっていた。護岸があちこちで崩れ、ある場所では車も走行できた堤防の道が寸断されていたのだ。また、鹿沼の中心部を流れる黒川も河川敷にある公園がずいぶん傷み、右岸側にはたくさんの土のうが積み重ねられていた。台風19号の被害は県南市町村に大きな爪跡を残していったことは私達の記憶に新しい。

この台風19号の大雨により緊急放流が関東・東北の六つのダムで実施され、ダム下流では避難のため大混乱になったと聞く。では、群馬県の八ツ場ダムはどうだったか。まだダムは完成していない。そのため試験湛水中であり、満杯にはなっていなかった。推進側は「ダムがあったからこそ大量の水を受け入れ被害を食い止めることができた」と言っているが、もし満杯であったならどうなっていただろう。他のダムと同様、緊急放流せざるを得なかったのではないだろうか。その時、下流はどうなる？

近年の台風は大型化し、その雨量はダムの能力をはるかに超えるものとなっている。ダムの治水機能の限界がすでに到来しているのだ。今、人命最優先の治水対策に変更する時期にきていることを「水源開発問題全国連絡会」では指摘し、次のような提唱をしている。『川は溢れることを前提にした二つの対策、「滋賀県流域治水の推進に関する条例」の全国化と、「越水に対して強い耐越水堤防工法の導入」』を先日の総会で決議したそうだ。

地球温暖化は世界中で日本が最も大きな影響を受けると最近の科学情報は伝えている。自然が毀したものは自然が修繕していく、という諺を聞いたこともある。世の中には絶対安心・安全というものはない。常に危険と隣り合わせに私達は暮らしていることを強く意識する時代に入ったということだろう。　（塚崎）

編集後記　12月に「スターウォーズ」最終回が公開され、SFファンとしては（映画の出来はともかく）「めでたくもありめでたくもなし」といったお正月。惑星を丸ごと破壊する超大型兵器を持つ悪の帝国支配に正義の騎士が立ち向かう「昔々はるか遠くの銀河」が舞台で、物理法則も今とはだいぶ違うらしく、あれこれ悩まずに楽しめる「スペースオペラ」でした■昨年夏公開の「ゴジラ キング・オブ・モンスターズ」も同じく荒唐無稽系の怪獣映画なのですが、キングギドラを操る秘密組織が「エコテロリスト」という設定が気になりました。1954年に公開された「水爆大怪獣・ゴジラ」は原水爆を発明した人類への警鐘がテーマでした。ハリウッド版になってもその精神は引き継がれているように思えます。けれど「自然環境を破壊し尽くしている人類はこの地球から消え去るべきだ」という環境保護集団が（こんな団体にスポンサーが付くのだろうかという疑問はともかく）宇宙怪獣を復活させ人類絶滅を計画するというシナリオは、60年前の「核兵器は人類を滅ぼす」とは異なる、新たな方角からの警告と感じます■SFは、文明を持つ惑星を一瞬で破壊したり日本列島を海中に沈めたりできる自由な表現形式です。そこで描かれた人類絶滅や大量殺戮の物語は「人類はこのままで良いのだろうか」という大きな疑問を提示しているように思います。　（T）